

この地平で、生きている。

09

* News Letter *

結晶母

Terra Renaissance

佐賀から、未来に挑む 平和の担い手を育む 実践的人財育成



— 2017年に始まった佐賀事業は、本年度より「グローバル人財育成事業室」として新たにリニューアルされました。従来の支援活動とどのように結びつき、どのような成果を生んでいるのか、室長の鬼丸へのインタビューから、事業の全貌に迫ります。

「グローバル人財育成事業（以下、本事業）の目的と、実施の背景を教えてください。」

ひと言でいうと目的は「平和の担い手の育成」です。テラ・ルネッサンスでは創設以来、国内での啓発活動に力を入れてきました。「世界平和の実現」のためには、現場での支援活動だけでなく、平和をつくるために進んでリーダーシップを取る人、つまり「平和の担い手」の存在が欠かせないからです。2017年には佐賀県にも事務所を開設し、これまで拠点としてきた京都や関西地方に加えて、佐賀県や北部九州でも、教育機関や企業等での講演による啓発活動に注力してきました。設立から21年の間に、テラ・ルネッサンスの講演に参加して下さった方は約21万人にもなります。

しかし、一度きりの講演やワークショップで、暗記型の受動的な学習ではなく、生徒自らが問題や課題を発見し、解決する能力を養うことを目的とした教育法です。

たとえば東明館高校の場合は、1年半の間、週6時間の授業をテラ・ルネッサンスが担当します。初年度は地理A・倫理の授業を使ってスタッフによる講義やワークショップを実施。世界の課題や、その背景にある社会構造を学びます。必要に応じて海外の駐在員や現地人スタッフとオンラインミーティングを行い、よりリアルな支援の現場の話も聞いてもらいながら、紛争の原因とは何か、そして支援とは何かを考えました。同時に、国語の授業では「子ども兵」について小論文を執筆したり、理系科目では、電力不足解消に役立つ「圧力発電」や農業肥料として活用できる「コンポスト」の仕組みについて学んだり、「ウガンダの元子ども兵の社会復帰支援」、「カンボジアの地雷被害者の自立支援」という具体的な課題に取り組みながら、身につけるべき知識や能力をそれぞれの教科で学んでいます。

翌年度は、初年度の学びをもとにウガンダ班とカンボジア班に分かれ、実際に現地の課題の解決を目指す支援計画を立案します。ここでも、現地職員とオンラインでディスカッションを



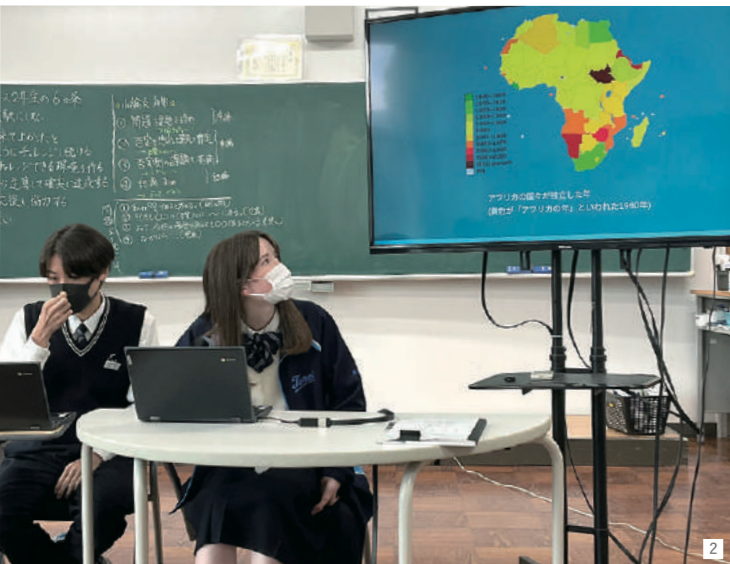
クシヨップで、参加者やその周囲の人の行動をどのくらい変えることができ、また、その変化をどれほど持続させられるか、限界も感じていました。

「長期的に平和の担い手を育成する場をつくれなにか」。そう考えていた2021年に、佐賀県基山町にある私立東明館学園の荒井理事長とお話する機会をいただきました。荒井さんは、平和のため、グローバルにリーダーシップを発揮する人財育成のビジョンに賛同してください、まずは東明館高校の探究コース2年生を対象に本事業を行うことになりました。今は、東明館高校と、同じく佐賀県の県立致遠館中学校の2校で本事業を実施しています。

高校生が、事業地の課題解決に挑む

「本事業は、具体的にどのようなプログラムでしょうか。」

PBL (Project Based Learning: 問題解決型学習)の手法を取り入れ、変化の激しいこれからの時代において、中学生や高校生が「自らの未来を自らの手で創造していく力」を育むことを主眼に、プログラムを設計しています。PBLは、文部科学省によって推奨されている「アクティブ・ラーニング」のひとつで、





3



4



5

[1]東明館学園との包括連携協定締結式典の様子、写真中央はテラ・ルネッサンス鬼丸、右は東明館学園理事長の荒井氏 [2],[3]東明館高校・探究コースの授業の様子 [4]ウガンダへ渡航の際、元子ども兵の受益者の仕事場を訪問した際の様子 [5]ウガンダ事務所を訪問した東明館の生徒をはじめ、スタッフや受益者との様子

しながら課題の特定、分析、計画を行うことはもちろん、計画を実行するための調整も生徒たち自身で行いました。自分たちが考える支援計画と現地のニーズとのすり合わせなど、「立案するだけ」でないプログラムに生徒たちも苦戦していました。が、国際協力の支援の本質を、実践的かつ体感的に学べたのではないのでしょうか。

—ウガンダのプロジェクトでは、生徒が実際に現地へ渡航したんですね。

そうですね。ウガンダ班は、紛争やコロナの影響を受けた元子ども兵の心理的ケアを目的とした「希望M.A.T.S.U.R.I」を立案しました。午前中は年齢別のサッカーイベント、おにぎりや焼きそばなどの日本食をみんなで食べる昼食プログラム、午後は部屋の壁一面を使った巨大アート制作などを組み込んだ1日がかりのワークショップで、「心身ともに豊かな生活を送り、未来を創造し、希望を持つてほしい」というビジョンを掲げて実施されました。

もともとは、生徒たちのプランに沿ってテラ・ルネッサンスが現地で計画を実行し、その結果をフィードバックする予定でした。それが、支援計画を立案する中で生徒たちから「実際にウガ

ンダに行つて、現場の様子を見たい」という声が上がったんです。正直に言うと、想定外でした(笑)。しかし、それだけの熱意を持つて本事業に取り組んでくれた証でもある。その主体性を尊重したいという思いから我々も各所と調整をはかり、結果的に5名の生徒がウガンダに渡航し、生徒自身もプロジェクトの実行に参画しました。特にサッカーイベントでは、300名近くの参加者が集う中、生徒たちが中心となってすべての試合の設営と運営をやりきりました。彼らにとつてもチャレンジングだったと思いますが、周囲の協力も得ながら予定外のシチュエーションにも臨機応変に対応してくれました。

事業の中で生きる 20年間の経験値

—本事業の中で、テラ・ルネッサンスのこれまでの経験はどのように活かされていますか。

まず、これまで支援の現場で実践してきた、オーナーシップの原則やオーダーメイド型支援の哲学が本事業でも活かされていると感じます。たとえば支援計画をつくる過程では、生徒たち自身が対象地域の人々やスタッフの話聞いて、現地のために何ができるかを考えてプロえるようになった」と話していたことです。ロジカルな思考で社会課題を発見し、支援方法を編み出す力ももちろん重要で、彼らも本事業を通じてそのスキルを獲得しています。しかし、それだけでは世界を変えられない。「なぜ支援するのか」という問いにおいて、「同じ地球に生きる人間だから支援したい」という素直な気持ちも、様々な課題に対して、主体的に取り組むグローバル人材やチームには不可欠なんです。東明館の高校生たちが、実際に現地の人とふれ合い、自分と世界、自分と世界の課題の関係を捉え直す中で、このように支援のあり方を考えるようになったのは想定以上の変化でした。

生まれ始めた「変化」と、 これから目指すもの

—1年半の事業を終えて、生徒たちにはどのような変化が生まれていますか。

多様性を自然に受け入れられるようになったり、主体的に動く力がついたり、良い変化はたくさん見られます。なかでも印象的だったのは、ウガンダを訪問したある生徒が「課題があるから支援するんじゃないくて、僕たちは同じ地球に生きるひとつの家族だから支援するんだと捉

—高校生たちがグローバル人材として育っているのを感じます。

生徒たちとともに、テラ・ルネッサンスの啓発事業そのものが育っている感覚もあります。本事業では従来の単発の講演とは異なり、生徒たちと時間をかけて関わり、その中で生徒たちの問題解決の力、レジリエンスを育めるようになりました。日々の関係性の中で周囲とつながりが育ち、レジリエンスが高まる。これはまさに我々が海外事業で取り組んでいることと同じです。

プロジェクトの完遂により、「実践知」を学び成長を実感



東明館高等学校
探究コース1期生担任
入試広報部長
山元 祐輝さん

2021年7月にテラ・ルネッサンスと連携協定を結び、本校探究コース1期生との実践的グローバル人財育成事業が始まりました。最初の半年間のテラ・ルネ講座ではアフリカの地誌学や、正義とは何か、支援するとはどういうことか、などの哲学を通して本質を学んでいきました。その上で、後半の半年間、私たちに何ができるのか、どんな課題にどう向き合っていくことが平和につながるのかを何度も自問自答しながら、ウガンダとカンボジアの現地プロジェクトの策定に取り組みました。現地プロジェクトをやり遂げることで、「実践知」を学ぶことができました。生徒たちには社会課題に対する当事者意識が身につく、将来何かの課題を発見し、解決したいと感じた時にすぐに行動できる人財に育ったと思います。

この事業で、世界の多くの課題を解決したり、大きな変化をもたらしたりできたわけではありませんが、生徒たちは確実に大きく変化し成長することができました。これは、「微力だけど決して無力ではない」という言葉の体現だと心から思いました。

思考と挑戦による学びが、人生における一生の財産に

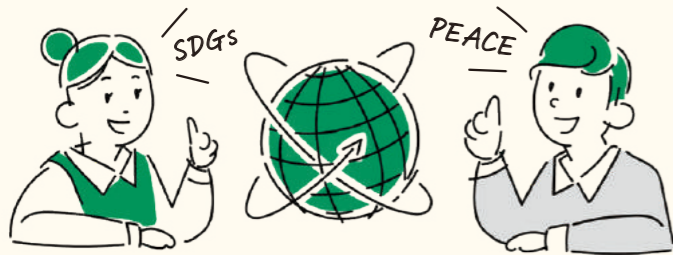


東明館高等学校
探究コース1期生
宮村 和暉くん

このプロジェクトを通じて大事だと感じた学びの一つが国際協力における支援の動機、社会課題を解決する動機に対する姿勢と考え方の変化です。

学び始めた当初は、なぜ私たち(日本人)が途上国を支援するのか?を周囲の人に説明するのに時間がかかっていました。まず、紛争鉱物の問題など、今の私たちの生活とアフリカの紛争を引き起こしている原因は密接に繋がっており、現地の課題解決に対して私たちにも責任があるということを知りました。また、先進国に住む私たちは、その発展の過程で知らず知らず途上国からの資源の恩恵を受けており、今、これから途上国に対して「恩返し」をする必要があるのではないかと学びました。

この動機付けはグローバル人財育成事業の授業で自分たちなりに必死に考え、見出しました。しかし、実際に現地での支援プロジェクトを実施し、ウガンダの皆さんとの交流を終えた今、「なぜ、支援をするのか」という理由を問われると「家族だから」と答えるようになりました。家族だから彼ら、彼女らが幸せになることは自分たちの幸せである、困っていたら支援するのは当たり前のことじゃないかを感じるようになりました。他の身近な社会課題の解決に対しても同じような気持ちを持つようになりました。最初は義務感のようなものが動機でしたが、今は“したいからする”し、それは当然のことだと思えるようになったのです。1年間、思考し、挑戦し、学び続けたこのプロジェクト。紆余曲折しながらも、歩み続けて得た経験や学び、気づきは僕たちの人生における一生の財産です。



ウガンダ訪問研修・帰国報告会の様子



希望MATSURIでのアート制作の様子

さらに2022年7月には、佐賀事務所を東明館高校の中に移転しました。NPOが教育機関の施設内に事務所を設けるのは、かなり珍しいケースではありますが、これにより生徒や先生が事務所を訪れたり、スタッフが生徒の進路相談に応じたりする光景が日常的に見られるようになりました。授業だけでなく生きた平和教育ができていくように感じます。また、これは副次的な成果ですが、テラ・ルネッサンスを応援してくださる方に「これがテラ・ルネッサンスの啓発事業です」と見ていただけの「場」ができたことも嬉しく思っています。すでに、企業版ふるさと納税や法人サポーターとしてご支援くださる方が東明館高校に足を運び、授業の見学に来てくださいました。今後、より多くの方にテラ・ルネッサンスが大切にしていく啓発事業を見ていただいて、その価値を感じていただきたいと思います。

これからの展望を教えてください。

まずはこれからの2年間で、東明館、致遠館以外の佐賀県の高校や大学などの教育機関で本事業を拡大したいと考えています。将来的には日本全国、さらに台湾や韓国、タイなどの東アジア、東南アジアでも展開していきたい。

グローバル人財育成事業を
企業版ふるさと納税
で、応援してください!



テラルネ 企業版ふるさと納税

検索

たいです。日本と海外の学生と一緒にウガンダやカンボジアの支援計画を立てたり、現地でワークショップをしたりと、平和の担い手を国境をまたいで育成できる事業にしたいという野望を抱いています。

テラ・ルネッサンスが創設当初から大事にしてきた「平和の担い手の育成」。これまでに培ってきた「海外の現場での支援活動」、「国内での啓発活動」の両方の知見を活かしながら、それぞれをつなぐ取り組みとして、本事業を発展させていきたいです。

(構成/守山瑞希)

活動レポート

アジア事業マネージャー 江角泰

村の希望を育む 次世代への訓練を開始

カンボジアのバットンバン州ロカブツス村では、今年度から新しい取り組みを始めました。それは、若い世代の育成です。4月に開催した村の住民組織のリーダーたちとも計画を確認し、5月から村にいる大学生1名と高校生1名を対象に、農業についての人財育成の訓練を開始しました。これまで、家畜銀行から家畜飼育支援によって、村の中で収入源を確保する支援を行ってきました。100世帯以上を支援してきた中で、大きな課題の一つは、家畜の感染症への対策です。

2021年の10月頃から2022年のはじめにかけて、いくつかの感染症によって多くの家畜が被害に遭いました。これらの感染症へのリスクと対応を村のリーダーたちも懸念しており、2022年度から新しい計画として、村の若い人財への育成に力を入れることにしました。

た。村の中で調査を実施した結果、4〜5年前と違い、村の中にも高校から大学まで進学して、コロナ禍でオンラインの授業を受けている大学生がいることが分かりました。彼らは、できれば村の中で収入を得たいと考えており、農業にも強い関心を示しています。明らかに以前の村の状況とは異なっていました。若い人財を選定し、農業専門家の持つ現地の伝統的な薬草を活用した知識や技術を伝えていく予定です。これからのロカブツス村での活動に、ご期待ください。



村の大学生(写真右)に野菜の栽培状況と土壌の状況を説明する農業専門家(写真左)の様子

活動レポート

アフリカ事業フルンジ事務所長 川島綾香

少しのキツカケから、 その手に未来を掴みとる

昨年11月から訓練を開始した子どもの保護と自立支援プロジェクト。洋裁、バイク修理、小規模ビジネスの3種類の訓練を行っています。バイク修理の訓練を行っていた12名の受益者は、約3か月の職業訓練を終え、今年の3月からビジネスを開始しました。「今日食べるものを、今日稼ぐ」という暮らしをしていた彼らには、技術を身につけても開業するための資金はありません。そのため、バイク修理を行うために必要な修理道具などを提供しました。私たちの自立支援

では、職業訓練から開業後のフォローアップまで一貫して行います。

そのような中、3月以降に外部環境の大きな変化がありました。政府の方針転換による首都におけるバイクタクシーの営業禁止エリアの拡大と、燃料不足の悪化です。この影響から、主なお客さんであるバイク運転手の収入が減ったため、意気揚々とバイク修理ビジネスを開業した受益者は厳しい状況に陥ってしまいました。それから月日が経ち、燃料不足に悩まされながらも収入は少しずつ増えてきています。さらに、バイク修理技術を活かして自転車や発電機の修理もできるようになり、身につけた技術を応用している様子も見られます。これからも、彼ら一人ひとりが持つ「未来をつくる力」を信じて、ときに優しく、ときに厳しく、自立への道のりをサポートしていきたいです。



バイク修理を行う受益者、手慣れた様子はまさにプロのようです

テラルネなひとびと

スタッフ編

古岡 蘭 Mayu Furuoka

政策提言室



こんにちは、政策提言室の古岡です。2017年から4年半ほどブルンジに駐在をし、今は駐在を終え、政策提言室でも新たなチャレンジをしています。

私は学生時代はウガンダの研究、卒業後はルワンダ勤務、そしてテラルネでブルンジ駐在と、アフリカと縁があるのですが、よく「どうしてアフリカなの？」と聞かれます。もちろんしっかりとした理由はあるのですが、奥底には、「双子の妹はアジアに関わり続けているから、彼女に関わりがないアフリカにいたい」という理由があります(笑)。これまで同じような環境で生きてきた私たちですが、双子ゆえに比べられることもあり、卒業後は



敢えて別々の道を選んでみました。決して仲が悪いわけではなく、今も似た仕事をしていることもあるので、互いに励まし合っています。ちなみに、「双子」から離れられたと思っていても、日本人女性とブルンジを歩いていると、「あなたたちは姉妹？」とよく声をかけられました…(日本人の顔が皆同じに見えるそう)。「似ている人」とはどこでも縁があるようです。

ファンクラブ編

川畑 みどりさん

和裁士



テラ・ルネッサンスは、「報道特集」で知りました。ウクライナのハンガリー国境近くに戦争から逃れて来た人たちに炊き出し、シャワー、仕事ができるように支援していました。テラ・ルネッサンスは、女性の自立を助けることが多いと思います。私も和裁でなんとかここまでやって来れたので、平穏な生活と仕事で自立ができることはとても嬉しいです。電力不足などウクライナの寒い冬が心配ですが、これからも活動を応援しています。

ファンクラブ会員、募集中!

1口1,000円(毎月)から、活動を応援できる「ファンクラブ会員」。情報満載の活動レポートや海外からのポストカードなどをお届けしています。お申し込みは、ホームページまたはお電話でも受付中。すでにファンクラブ会員の場合は金額変更も可能です。お気軽にお問い合わせください。

テラルネッサンス ファンクラブ

検索

電話 075-741-8786 (月-金 10時半-18時)



ハンガリーのマリアポーチにある避難施設で冬服の支援を行う様子

冬服や薪を支援、 戦渦の冬を乗り越える

活動レポート

ハンガリー事務所プロジェクトコーディネーター 小川さくら

ウクライナ難民・避難民支援では、冬支度を開始しました。ウクライナおよびハンガリーは寒さが厳しく、暖房器具や防寒着などの衣類がないと最悪の場合、凍死してしまう可能性があります。そこで、冬服や薪、ストーブの支援を進めています。現在は200〜300人が対象ですが、引き続き支援の拡大を目指しています。また、薪は購入するほか、CSCS事業(生活再建支援として社会貢献となる仕事を提供し日当を支払う支援)の一環として薪づくりも実施しています。

住居まで届けています。また、住居を訪ねることで、近況を聞いています。さらに、新たに開設したハンガリー事務所は「テラ・ルネッサンス・ハンガリー財団」として法人登記を完了しました。今後は、戦況の変化にシなやかに対応できるように、難民・避難民の方々の体制をより確実にしていきます。また、復興段階を見据え、本格的に長期的支援を計画・展開していく予定です。





世界の扉絵 .09

カンボジアにおける家畜飼育による自立支援の様子です。「お金」を得るための単一換金作物の栽培によって、環境は破壊され、多額の債務を抱える農民が続出しています。アグロエコロジーの概念から、伝統的な知識や技術を活用し、持続性と経済性を両立した暮らしを目指しています。



理事・アジア事業マネージャー
カンボジア事務所長

江角 泰

terra_ngo

第52回毎日社会福祉顕彰、第1回SDGsジャパンスカラシップ岩佐賞「平和の部」を受賞しました。毎日社会福祉顕彰は、福祉の向上に尽くした個人、団体を表彰する賞です。国際協力NGOとしては約四半世紀ぶりの受賞となりました。岩佐賞は、医療・教育・福祉・環境・平和・芸術・農業などの分野でめざましい功績を残した個人、団体、および課題解決に取り組んでいる個人、団体を支援する賞です。それぞれの受賞を励みに、今後も活動に邁進していきたいと思えます。

W受賞！長年にわたる支援と平和のための活動を評価



第52回毎日社会福祉顕彰贈呈式に参加した理事・鬼丸

News Letter.09 結晶母

2022年12月 発行

発行◎ 認定NPO法人テラ・ルネッサンス

発行責任◎ 小川 真吾

企画編集◎ 小田 起世和

本書の一部または全てを複写・転載引用する際には、予めテラ・ルネッサンス事務局までご連絡ください。

© 2022 Terra Renaissance

- 日常シリーズ・ウガンダ事務所の場合 -



バスの窓から
商品を売り込み!

こんなにたくさん
食べられない(汗)

ウガンダのちょっと強引な売り子たち
その勢いには驚きますが、肉の味はとても美味しいです!